

巻頭言

竹尾 恵子*

国立看護大学校長

*Keiko Takeo/President of National College of Nursing, Japan

国立看護大学校研究紀要も3巻目が刊行される運びとなりました。同時に本学も4年目を迎えています。第1期生たちは今や基本的な科目をほぼ修了し、本格的な看護学実習に入っており、入学当初に比べると、振る舞いや表情がぐっと成長してきているのを実感しています。また教官たちも、教育に、研究にと活躍しておられ、紀要をそうした成果を記録していくために大いに役立ててほしいと願っています。今年は研究活動をより活発に遂行していただきたいと各教官から研究テーマを募り、研究費に関してもできるだけ支援するよう努めてきました。

そうした願いに答えていただけたのか、今回は紀要への論文の投稿が倍増したようで、うれしい限りです。大学は教育機関であります。同時に教官の方々の日々弛みない研究活動が重要であることは論をまちません。最終学年になる学生には卒業研究が課されており、日ごろの教官の研究への意欲・実績が、学生たちへの指導に反映されるものと思っています。

先の紀要巻頭言にも書きましたが、本学は先端的医療看護の推進、国際協力の下、看護の専門家として指導的役割を担っていく使命があります。ナショナル・センターや国立病院の看護職者と連携して、新しい看護の問題点を見だし、研究課題として取り上げ、臨床に役立つエビデンスをこの紀要に示していきたいと願っています。

また、本学看護学部の完成年度に引き続いて、政策医療看護学を専門とする大学院の立ち上げを現在、準備しているところです。政策医療を担う看護学のあり方を探求し、実践に生かし、その成果を実証するために、この紀要は大いに役立つと確信しています。

本学の大きな目的に看護の国際協力がありますが、看護学研究の面からも今後、協力体制を整え、成果を挙げていきたいと考えています。